屋久島に旅して

江　越　千　代

屋久島は、鹿児島県大隅半島南端の佐多岬から、約60kmをへだてた洋上、北緯30度線直下にあり、我が国最南の島である。現在の日本の島嶼中、北海道、本州、四国、九州の四大島を除き、佐渡島、奄美大島、淡路島、天草大島に次ぐ第5番目の島で、東西27.3km、南北25.2kmの心臓型の島である。

全島が、山岳の大集団で、全九州の最高峯宮浦岳（1.935m）第2位の永田岳（1.890m）は、島の中央にあり、東よりに第3位の黒味岳（1.835m）が聳えている。これらは四国の劍、石槌山クラスの高度で、他に1.500m以上の岩峯群が11も数えられる。また1.000m以上の山は30余といつた、山また山の重なりで島が出来ている。

行政的には、鹿児島県熊毛郡に属し、上、下の両屋久村に分れ、人口は、約21000人。海岸線から急に山岳に入るという所が多いが、全島の部落は（旧部落は17ある）殆ど海岸より約2km以内に発達したものである。

海辺一帯にはバナナ、パインアツプル、パパイヤが実り、ヘゴやビロウ、ガジユマル、アコウなどの亜熱帯植物が茂つているかと思うと、島の中央部の2.000m近い山岳頂帯では、冬になると白雪皚々として、根雪が2m以上にもなることが珍らしくなく、アイゼンや、ピツケルの世界になるといつた全く驚嘆すべき島である。このように、気候の激しい変化がある上に、始終襲う台風の影響もあつて、奇妙に萎縮した植物があり、寒冷の高地では、北海道あたりの珍しい、美しい植物の群落をさへ見る。私は幾度か厳く秀麗な岳に登り、何十度か、何千年という原始林に覆われた深谿を渉つて、そのあまりにも雄大な植物に、またそのあまりにも可憐な花に出逢つて、今までにかつて味わつたことのない驚きとよろこびにひたり、その神祕さには、何かしら眼がしらの熱くなるのさえおぼえた。私は再び、いやまた幾度かたづねたい衝動にかられた。

山の中腹は、数千年の屋久杉の原始林に覆われて、島とも思えない深山幽谷ををつくつている。台風引受け所の名をもつて知られる屋久島のこと、8,000mmという驚異的な雨が降る上に、南国のカツカツと照る太陽の為に、あらゆる植物が悠然と生育している。老木は亭々として空をつくばかり、下草は目を見はるばかりに繁茂し、屋久杉は勿論のとこ、他の種々の樹木にも、着生植物が見事に生ひ茂り、見上げる大樹に30種、如何かすると50種を数えるといつた有様。古木の樹上に、ナナカマドの喬木が実をつけていたり、老杉に紅くシヤクナゲがもえていたり、大樹の梢裏に蘭のかれんな花を見つけたり、ただただ驚嘆の目を見はるばかりであつた。山中では、私も何度か出逢つたが、数千の鹿と猿の棲息が見られるといはれ、動物達にとつても、この島はよきすみかなのであろう。ハブが生息をせぬ為、小鳥たちにとつてもまた楽園の島で美くしいコマドリの声に目をさまし、小鳥たちのやさしい唄に眠つた花の江河は、私にとつて終生忘れられない美くしい夢であり、再び見たい夢でもある。

南海の女王ツマベニ蝶がひらひらと飛びままわつていたことも、郷愁にも似た香を、めぐりいつぱい漂はせていた、びつくりするような大樹のクチナシのあの真白い花も、私には忘れられない。

船から上がり、島に一歩を印して、先ず驚かされたものにガジユマルがある。一寸見た位はで樹高も計れない位高く、梢の先きも見えない程の空から、気根を長く地上にさらして、いつたい何百年の樹齢というのか、もつれ合い、よじれあい、またかたまつたりして、悠々と生きている不思議な姿、その不思議ないのち。全く驚きと不思議にはじまる島である。海岸に近かい地方では、ヘゴの大樹や、ビロウ、シシガシラ、オオタニワタリ、メヒルギ、フトモモ、ナンテン、マンリヨウ、ハナバシヨウ、シユロチクなどにも、さんざん驚きの目を見はつた。

500m位から上は、何千年の老杉、千年以上の屋久杉に交つて、ヤマグルマの大樹や、ヒメシヤラ、ナナカマド、サクラツツジ、モミ、ツガ、ユス、ヒイラギ、リヨウブ、ヤクシマツバキなどが目につく。1.000m以上の渓谷や、湿原地帯には、ミズゴケやモウセンゴケ、ヤクシマトキソウ、ヤクシマシオガマ、ヤクシマシライトソウ、ヒメコイワカガミ、ヤクシマリンドウ、チヤボゼキシヨウ、セントウソウ、ヒメツルアリドオシ、ヤクシマシヨウシヨウバカマ、シヤクナンガンビ、ヤクシマフウロ、セントウソウ、ヤクシマヒメオトギリなどのかれんな美くしい花々が見られた。1600mの高地帯には入ると、屋久島特有の、ヤクザサが全山を覆いはじめるが、これに、ハイビヤクシン、ヤクシマシヤクナゲ、ツゲ、ドウダン、ヤクシマミツバツツジ、ヒカゲツツジなどが見られ、その

美しさには、ただただぼうぜんとさせられて終つた。ヤクシマシヤクナゲは、山頂にゆく程、葉が細く、葉裏の毛は深く褐色も濃くなり、花もまた紅色が濃くなつてゆく。幹や葉が、高嶺の酷しい寒さや風雨にも耐えて、がつちりとかまえている芯の強さにくらべて、あの花のやさしさ、あのほのぼのともえる美しさはほんとうにたとえようにもなく、しやくなげこそは屋久島での深い思い出の花である。

小杉谷から植物を採集しながら花江河に登つたが、昔はここの地名を 花の籠(ハナ エゴ) と言つていただけに屋久杉の銀白色の立枯木、老杉の偉容に加えて、ハイビヤイシンの群青、ツゲの白い樹肌、それに、あたり一杯に真白にこぼれ散り敷く花また花、桃色に、うすみどりに、黄に、葉も見えない程の鈴なりのアセビの花房、それらを背景にして花江河の前庭は展がる。

内地の五月の山野は、風には未だ、どこか冷やつとするものが残つていても、小川の水は、やわらかくぬるんで、澱みがちな、何かふくらみのある温かさが感じられるが、ここ花江河の五月の庭の水は、まだまだ寒冷そのもの、しかも透きとおつたきれいな水だ。山を探ねる旅人の水場になつているが、長くは手をつけていられない、きれるようなきれいな水だ。私は両側からかぶさつて来ている湿原の土手に、またその水の中に' 名前も知らない何種類かの可憐な植物を見つけた。ヒメオトギリかと思われる 5cmにも足りない茎丈、2mm位の葉がうすみどりに 1mm位の、やつと目につく位の黄色い花が水の中に透きとおつて見えていた。花をつけていないものも入れて何種類かの植物を陛下の為に採集する。私は昨年、神戸に両陛下をお迎えしてからの御縁で、その後もずつと陛下の植物の御研究の方面で、少しばかり御用をおつとめしており、植物の採集の方も今迄の三倍になつたわけだ。一つは先ず陛下に、一つは兵庫県生物学会のお親しい先生方に、一つは自分にと一。屋久島の旅では、こんなこともなお更に深く、生涯忘れがたい思い出ともなろう。

湿原地帯は、花江河の広い部分を占めている。みどりの海底のような湿原のところどころの樹海から、山尾根に向つては、点々として花崗岩の頂頭が配され、文字通り造園の祕境！といつたところだ。千年二千年という屋久杉の萎縮型の枯木や、何千年か樹齢も知られないという銀色の老杉は、美しい限りのオブジエで、シヤクナゲ、アセビ、ツツジ、それに溪間や湿原にある5cmにもみたない草丈に、何mmといつた可憐な花々の群落を、また高山植物のお花畑を見ては、同行の方達と〝全山そのまま持つて帰えりたい人もあるでしようねえ〟と話し合つたりした。

山頂に登ると、ヤクシマウスユキソウ、コメススキ、イワキンバイ、ヤクシマオトギリ、ヤクシマシオガマ、ヤクシマリンドウ、キスミレ、タカネニガナ、ヒメコイワカガミ、マイズルソウ、ヤクシマシヨウマなどの可憐な、美しい高山植物が見られた。このように屋久島ほど顕著に、亜熱帯から寒帯えと、垂直的に変化のあらわれるところは、他ではあまり見られないのではないだろうか、そればかりではないかも知れないが、世界の植物学者達からも注目されているときく。

屋久杉、ヤクシマツバキ、ヤクザサのことなども、植物学者の間でもいろいろ問題があるようで、屋久杉などは樹齢は多く2000～3000年に達して居り、優に世界の巨木樹林にも比肩され得るものであるといわれる完全な原始林の状態を保つて保つて亭々と聳え、5.60mも天空につき立つている姿は、一寸他では見られない壮観さであつた。

ヤクザサも、私の浅見ですら三種類程は（さがせばもつとあつたかもしれない）あると思われ、室井先生のお土産に少し採集して持つて帰つたが、やはり（ヤクシマダケ、カンザンチク、ハチク）の3種類があつた。

屋久杉は昔、神木として取あつかわれ、全く伐られなかつたらしいが、300年程前に、屋久島の聖者と云われた高僧如竹が、屋久島発展の為に、神のお告げと称して、平木用（屋根葺用）に伐りはじめたのは有名な話である。3cm位の切面に50年の年輪を数えるといつた古杉名木は、質がちみつで、かたく、美しく、今では骨董的価値があると云われている。屋久杉は、二、三百年、六、七百年といつた年代のものが全くなく、1000～3000年という老杉から、中年の世代をぬいて子杉ととんでいる。丁度ロマンスグレイと、ベビイ群の集りのようだ。

今一寸思いかえしても美しく忘れられないものに、ヤクシマシヤクナゲ、ハナバセウ、フトモモ、トビウオバナ、アブラギリ、シユロチクの花、クワズイモ、ヤクシマウスユキソウ、シヤクナンガンビ、ヤクシマリンドウ、ヤクシマシライトソウ、ヒメコイワカガミ、キスミレ、サクラツツジ、ヒカゲツツジ、ミツバツツジ、ナンテンマンリヨウ、キンギンソウなどがあり、忙がしい旅のなかから、スケツチのノートを埋めていつたものだ。

（1957.9.24. 東京にて擱筆）。

江越女史の放送

この屋久島の話は去る10月21日22日にラジオ神戸の教養講座の時間に屋久島植物の話、県花ノジギク及び六甲山特産植物について放送された。（室井　綽）

屋久島歌抄

（行程、1957，5，22－6，4）

桜　島

消えのこる夕映とわれの間にたつ桜島今日は噴烟も見えず

開門岳

空と海とのけじめに高き薩摩富士むらさきけぶる果に目をやる

一湊港にて

今踏めるここが屋久島と自らに微笑みかけし岸壁の朝

永田岳

たたなづく永田岳の秀に朝光の美しき日よこのはての島に

しやくなげ（永田島にて）

島の花山々の火ともえてゐむしやくなげは匂ふ旅の心に

尋常のよろこびならずさいはての岳に登りて花に逢ひ得て

岳まゐりの花、しやくなげ祀るを

しやくなげを山のみ霊とかしこみて家に祀るをとがめあらすな

安房にて

屋久島の聖如竹の碑を前に現しきわれの歩みを思ふ

カジユマルの大樹

もつれ合ひまたかたまりて何百年カジユマルは気根を地上にさらす

気根長く地上にもつれてガジユマルはあやしき生命にもえむとはせる

安房より小杉谷へ

（小杉谷へトロリーにて600メートル登る）

トロツコを操るシエルパの眼ざしをたのみて吾ら手をつなぎ乗る

小杉谷にて（中島権現千尋の滝）

深谿に湧きてはのぼる霧をすかし千尋の滝ははるかに見ゆる

眼底にのこりて匂ふきりの花山谿深く夢のごとくに

ヘ　ゴ

みかえり見るヘゴの大樹に直線光あたりて透るやはらかき影

屋久島椿

このはての島の原始林に散る椿大樹のかげにもだすくれなゐ

太忠岳

メンヒルの岳にぬかづき深谿は何を祈りて今も生くるや

小杉谷名木屋久杉

わが前にたつ岨角の屋久杉は千年二千年の齢を言はず

踏み入りし深谿の老杉すこやかに木洞のなかに浄き水わく

杉木立しんとせる声胸にきて行者ごときわれを寂しむ

木魂神社（ウキルソン株）

三千年の夢を沈めて静かなり屋久杉はただ亨々と聳ゆ

さくらつつじ

小杉谷木魂神社のかたはらのさくらつつじの深き花いろ

三代杉

五千年の三代杉に向きて佇ち空をつきさす梢も見たり

五千年老杉の根元未だ朽ちずそれの祠に額下げて来ぬ

小杉谷溪谷にて

渡りゆく幾本目かの丸木橋眼下二百メートルちらと岩見ゆ

老杉に着生開花するシヤクナゲ

深く積む谿あひの樹々の葉を踏みて仰ぐ老杉にシヤクナゲもゆる

花の江河にて

絵にしたく絵には得ならぬ花江河めぐりはみどりの樹海に沈みて

つげの花

朝もやにつつまれてゆく花江河白きつげの花いつぱいにこぼる

花の江河にテントして二夜

花の江河の一夜は雨の音をきき鹿の声きき鳥の声きく

黒味岳にて

黒味岳のはいびやくしんの群落に一本くれなゐに燃えていし花

古木老杉の立枯木

片陽でりのなかの老杉銀白色に雲ながれゆき霧つつみゆく

たてるみな銀白色の立枯木齢何千年聖者のごとく

黒味岳より

連山のひだ幾十条雨けぶる永田岳はるか宮の浦はるか

モツチヨム岳

モツチヨム岳三百メートルの大岩峯なだるるにただ目を見はり佇つ

ふともも

山すそにふともも匂ふ日しやくなげの岳にもゆるを見たるこの旅